

美濃市 ごみの持ち帰り 空陸で呼びかけ

河川敷、ドローン活用



高性能スピーカーを搭載した産業用ドローン。自動操縦で約1キロ間を往復した＝美濃市前野、長良川

行楽客のごみの放置が課題となっている美濃市の長良川と板取川で2日、ドローン(小型無人機)を活用した「市清流クリーンプロジェクト」が今年も始まった。10月まで、空からはドローンで、陸ではスタッフが行楽客にごみの持ち帰りを呼びかける。初めて取り組んだ昨年は、長良川でのごみの量が前年よりも6割

ほど減った。市民生部の西部睦人部長は「今年は新型コロナウイルスの5類移行で、昨年以上の行楽客が想定される。コロナ禍前よりもどのくらいごみが減るか注視したい」と話す。

ドローンによる啓発は、市と連携協定を結ぶドローン事業者「ROBOZ(ロボッツ)」＝恵那市＝が担う。高性能スピーカーを搭載した産業用ドローンを使い、自動操縦で河川敷の約1キロ間を往復する。事前に収録した3カ国語(日本語、英語、ポルトガル語)の啓発音声流すほか、水難事故への注意を促す音声も流す。陸上では、市シルバー人材センターのスタッフが行楽客に直接呼びかけるほか、ごみ拾いも行つ。

初日は、前日の雨の影響で川の水位は高かったが美

濃市前野の美濃橋付近の長良川、同市長瀬の板取川とともに大勢の行楽客が訪れ、美濃橋付近ではスタッフら約10人が啓発を行った。市によると、昨年7～9月に美濃橋付近で回収したごみの量は167キログラム(前年比約58%減)、同市長瀬の板取川でも97キログラム(同約40%減)と、いずれも大幅に減少した。プロジェクト提

案者で地域おこし協力隊員の小椋唯さんは「ごみが減り、手応えがあった。今年も人の動きなどを見て効果的な活動をしたい」と話す。

ドローンは土曜、日曜日、祝日を中心に一日2回、計25日間飛ばす。陸上での活動は計61日間を予定し、夏休み期間はほぼ毎日行つ。(佐名妙予)